散華の世代から

吉田 満

散華の世代から

吉田満

講談社

著作
『青森讃歌』『戦艦大和ノ最期』『鎮魂戦艦大和』『提督伊藤整一の生涯』その他

散華の世代から

一九八一年三月二十七日　第一刷発行

著者　吉田　満
発行者　野間惟道
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振替　東京八―三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社
定価　一二〇〇円
© Mitsuru Yoshida 1981 Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
0095-183619-2253（0）　（文1）

目次

I

戦没学徒の遺産　8
学徒出陣三十年　26
散華の世代　30
戦中派はなにを為しえたか
——阿川弘之『暗い波濤』をめぐって　44
戦争文学者、この三十年の心情　52
戦争文学の広さ　55
海軍という世界　59

II

津軽の四季　68
青森の思い出　69
十和田と乙女の像　71
青森の人びと　76

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ノルウェーと青森　78
総合都市への夢　81
みのりある対立　84
青森は未来県　87
大県岩手　92
われらに郷土館を　95
地方文化を育てる　98
東北・きのう・明日　108

Ⅲ

太宰治と津軽　138

Ⅳ

一年の計　190
一生の趣味　193
網干(あぼし)さんにとっての下北　196

弁護士ギル 202
伝説の中のひと 205
伝説からぬけ出てきた男 209
江田島 212
二つの慰霊祭 215
昭和の五十年を送って 218
転機 219
戦争体験をめぐって 223

V

〈対談〉戦争世代と戦後世代 大久保喬樹 吉田満 232
あとがき 251
観桜会 増補遺稿 253
初出一覧 260

散華の世代から

I

戦没学徒の遺産

終戦の日、私は高知県の須崎にいた。高知市から汽車で一時間ほど南西に行った漁港で、当時四国では最大の人間魚雷基地がそこにあった。海岸を見下ろす法院山の峠の上に電探を据えつける作業隊の隊長として、本隊から峠の下の押岡部落まで派遣されていた私は、その日の朝、部下を配置につけた上、重大放送を聞くため正午までに本隊に馳せ参ぜよとの電話命令を受けていた。

その日は、朝から灼けるような南国の太陽が照りつけ、二八〇メートルほどの峠の上から土佐湾を通して見下ろす太平洋は、遙かに白く盛りあがって輝いていた。その水平線の眩いような一線に、肉眼でもわずかにそれと識別できるほどの黒点が点々と散らばりつつあった。米機動部隊の大兵力が、威嚇のための接岸を開始したのである。

八十名の下士官兵に、「いよいよ今日が最後の日と思え」と引導をわたしてから、私は全員に、下着にいたるまで一切の清装を命じた。もし艦砲射撃がはじまれば、その第一斉射がわれわれの頭上に落ちることは確実と思われたからである。しかも敵が上陸した場合、本隊がたとえ後方に避退しても、われわれ作業隊は、法院山山頂を死守せよと固く命じられていた。

私の派遣隊の任務、すなわち上陸用舟艇射撃のための電探基地の建設は、その最終期限を、たまた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ま八月十五日と定められていた。それはきわめて無理な工期で、夜を徹しての突貫工事が続いたのだが、最終日には、工事完成の手ぎわを見とどけなければならない。それを了えて本隊にかけつけてみると、予定の正午はかなり過ぎていた。

その時の光景を、私は忘れることができない。

兵舎の裏の広い営庭に、戦友の人間魚雷搭乗員たちが、一人ずつ離れ離れに、倒れたまま天を仰いでいる。盛夏の土佐では、中天から直下する陽射しの強さと、炎天の土の照りかえしのはげしさは、想像を絶するものがある。しかも彼らが例外なく目をつぶらずに、真っ直ぐに天を見上げている視線の鋭さは、異変の発生を直感させた。「何をしているんだ」

それへの答はなく、身近にいる一人から、「戦争は終った」という独り言が返ってきた。

「これからどうするんだ」

その返事を聞くうちに、彼らは一人一人孤立して苦しんでいても、思いはほとんど一つのことに凝集しているのを私は発見した。それは、定められた死に場所、つまり自分の配置である人間魚雷に入って基地を発進し、そのまま海底に沈みたいという願いであった。どこを通って、どこに行き着くか、どんな水深とどんな底質を墓場に選ぶかが、いま彼らの思案のしどころなのであった。

須崎のあたりは、海辺の美しさで知られたところである。金浦(きんぽ)湾から野見(のみ)湾にかけて、また沖合いの戸島、中ノ島、神島にかけて、無数の入江や瀬がある。どの搭乗員たちにも、それぞれ大事な思い出に結びついた、特にお気に入りの場所があった。そこの海底の美しい優しい砂の上に、魚雷を据えて永久に機械を止めること、それが敗戦という事実に対する、彼らの最も素直な反応だったのであ

る。

彼らはなぜ、終戦を喜べなかったのか。出撃命令を順番に待ちながら、一日一日と生命を繰り延べて生きてきたような生活の果てに、その生活から解放されることを知った時、それがどうして端的な喜びにつながらなかったのか。自由な青春をもう一度手に入れることができるならば、むしろどんなに狂喜したとしても不思議はないはずではないか。

人間魚雷の勤務は、並外れた体力と気力を必要とする。そしてなによりも、人間であることを忘れた非情さを必要とする。そうでなければ、もともと生ま身の人間の搭乗を予定していなかった必殺兵器の息苦しい孤独と肉体虐使の姿勢の中で、たとえ短い時間でも無事に艇を動かすことは不可能であったろう。

血の気の多い青年たちに、どうしたら〝人間〟を忘れさせることができるか。それには、一切の人間らしいものを身近から奪い取るのが一番手っ取り早い。戦局が迫ってくると、出撃間際には、外出も、娑婆との交通も、いささかの娯楽も、ヒゲを剃ることすらも禁じられた。ただいざ出撃に当って、真っ暗な艇内の潜望鏡に下げることを許された指一本ほどの可愛いマスコットの人形、それだけが、その艇の持主が夢多い青年であることの唯一のシンボルだったのである。

彼らは、ひとかけらの〝人間性〟を大事に抱きしめながら、祖国と同胞を身を以て守りうるのは、自分たち青年のほかにないことを納得していた。しかしそこに行き着くまでには、ほとんど例外なく、長い苦悩と自問があった。たしかに戦争というものの悲惨さ、空しさを実感するのに、人間魚雷の搭乗員になるほど絶好な道はなかったであろう。なぜなら、毎日のように、およそ青春の豊かさと

は正反対の、無雑作な安直な死と直面することが、彼らの日課だったからである。

保身のためならば、国と仲間とを守るというみずからの使命を否定して、身軽な道を選ぶことは容易であったろう。自分の死と戦争とを引きかえにする、そうした宿命を避けて通る余地がありはしないかと、彼らはどれほど執拗に求め続けたことか。しかしほとんどの場合、それは空しい努力に終った。誰かがその役割を果さなければならない以上、健康で平凡な若者以外にそれを負う者はなかったのだ。

真実、彼らは戦争を好まなかった。あのような愚かな戦闘の渦中にいて、誰が戦争を愛好しえよう。しかし同時に、彼らは戦争について多くを知らなかった。多くの情報を持たぬままに、戦争から日本と日本人を守ることが、自分たち青年の責任であると考えた。そう考えることに自分たちを追いこんでいった。少なくとも〝人生〟というものの意味を真面目に求めようとした平均的青年にとって、自分の若年の死を納得する道は、そのほかに見出し難かったのだ。

苛烈な訓練は、特攻出撃という異常な肉体労働に堪えうる体力と気力とを養うには、役立ったであろう。しかし生に対してこれほど淡白な心情を育てたのは、みずからの決意であった。終戦の知らせをきいても、〝平和〟の再来を喜ぶ余地さえ全くないほど彼らが死と戦争とに密着していたのは、みずからの生命に課した責任の重さの故であった。それは長い葛藤の末にようやく辿りついた帰結であっただけに、ことのほか胸中深くくい入っていたにちがいない。

*

この春、二十四年振りに私は須崎を訪れた。かつて人間魚雷の巣であった広い湾内は、今や〝はまち〟の養殖で賑わっており、筏で埋まるようであった。湾をとりまく岸壁、ことに串ノ浦のあたりには、人間魚雷の格納庫として掘られた洞穴が、いくつか残骸をさらしていた。はじめて掘られた時、それは精巧なトンネルの作りで、奥までレールが敷設され、出撃の下命があれば、人間魚雷はレール上を滑って、そのまま海中に躍り出る仕組みになっていた。

洞穴が全くその原型をとどめていないのはいうまでもないが、中には入口だけは元のままの大きさで、密生した雑草越しに、奥の闇が無気味なひろがりを見せているものもあった。しかし大半は、中がほとんど崩れ落ち、わずかに外から削られたような跡が認められるに過ぎなかった。

春の南海の潮は悠々とした流れで、陽光がさんさんと降りそそぎ、山の若い緑は燃え立つようであった。

微風の中を舟を走らせていると、終戦からしばらく前のある日、この湾上の内火艇の中で、同期の人間魚雷搭乗員と交わした短い会話が記憶によみがえってきた。その学徒兵出身の少尉は、数日前、出撃予定者の名簿に名を連ねていた。予定通り艇は母艦から発進した。その直後に、機械の故障が発見された。もし直進して機械の調子が戻らなければ、全く無意味に海底に沈んだまま、死を待つほかないこととなる。

きわめて危険ではあるが、ハッチをあけて魚雷から脱出することは不可能ではない。頭に一トン半の炸薬をつけた特攻兵器がひとたび発射されて、しかも生還する道はそれしかないとされていた。発進直後だから、泳いで母艦に帰投する望みもないではない。

とっさの判断で、彼は〝最期と定められた配置〟を捨て、〝生きて還った特攻兵〟の屈辱を選んだ。並外れた勇気と精神集中力が、この困難な作業を成功させた。

しかしそのてんまつを語ってきかせる彼の表情が、いかにも硬く暗いのはどうしたことか。死ぬはずの人間が生きて戻れば、仲間からそれほどにひどい侮辱を受けなければならないのか。

彼の悩みは、そんなことではなかった。「きれいな気持で死ぬ。それはただ一度しかできないことだ。祖国のため、同胞のために死ぬ。俺はたしかにあの時は、そう納得して出撃した。しかし、もう二度とできない。なぜかは分らんが、死ぬということの裏側を見てしまうと、二度とあんなにきれいな気持にはなれない。俺はなんと馬鹿なことをしたのだ。犬死にと分っていても、なぜあの時そのまま突っ込まなかったのか」

その日から会う機会がなく、やがてしばらくして、再び出撃したという知らせを受けた。彼の心痛にはかかわりなく、いちど出撃の順番に当った者が、長くそれから外れていられる道理がない。戦果は確認されていないが、今度は確実に目標に向って突進していったという。

彼はその時、何を考えただろうか。自分の命に課せられた使命などを持ち出すのは、うぬ惚れだと呟きながら、無表情で艇を走らせたのか。騙されてもそんなお人好しになるのは真っ平だと、叫んだだろうか。

おそらく、そうではあるまい。一度目のようにきれいに死を覚悟することは出来なかったとしても、彼はやはり、自分の死に課せられた使命への期待に、すがるほかなかったであろう。もし自然な感情が許さないなら、何が生甲斐かを求める執着が、それを命じたであろう。なぜなら彼にとって、

死に立ち向う武器は、事実祖国と同胞の未来への期待以外に与えられていなかったからである。

*

青年学徒が、それほどまでに真剣に死をもって守ろうとしたものは何なのか。まずその典型的な一例を掲げよう。筆者の鈴木実は、学徒兵として陸軍に入隊、広島の原爆後二十日目に死亡した。息を引き取る三十分前に書かれた遺言状には、第一線の戦闘部隊の例にあり勝ちな気負いがなく、素直に死に向った心のひだが読みとれる。

――（前略）父母上様ハ晨（アシタ）ニ月ヲ仰ギ夕ベニ星ヲ戴キ、コツコツト御働キニナッテ自分ヲ大学ヘ迄進マセ下サレ、本当ニ父母上様ニ苦労バカリカケテ何ノ御恩返シモ出来ズニ死ンデ往ク自分ハ、残念デ御詫ビノ申様ガアリマセン。然シ父母上様、自分ノ身ハ死シテモ魂ハ必ズ仏前ニテ父母上様ヤ姉上様妹達ヲ常ニ見護ッテイマス。魂トナッテ父母上様ニ孝養ヲ尽シ度イト思ッテイマス。ドウカ父母上様、姉上様、妹達ヨ、泣カナイデ下サイ。魂トナリテ常ニ皆ト一緒ニ働キ皆ト一緒ニ食事ヲシ皆ト共ニ笑イ皆ト悲シミヲ共ニシマス。之カラ秋ニ入リ百虫ノ声ヲ聞クニツケ、冬トモナリテ落葉ノ淋シイ林ヲ見ルニツケテモ、決シテ泣カナイデ下サイ。ソシテ如何ナル事態ニ遭遇スルモ、身体ニ充分注意シテ断乎トシテ事ニ当リ、何時マデモ達者デオ暮シ下サイ。

父母上様、去ル六日ノ原子爆弾ハ非常ニ威力ノアルモノデシタ。自分ハ其ノ為ニ顔面、背中、左腕ヲ火傷致シマシタ。然シ軍医殿ヲ始メ、看護婦サン、友人達ノ心ヨリナル手厚イ看護ノ中ニ最後ヲ遂ゲル自分ハ、此ノ上モナイ幸福デアリマス。――

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c